
神様と出会う二つの方法

虎鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様と出会う二つの方法

【Nコード】

N6702X

【作者名】

虎鉄

【あらすじ】

人が生きるにあたって人生の転換期があるとしたら、春といえるだろう。特に桜が咲くのを「出会い」とすれば散るのは「別れ」というように、そんな比喻を今とつさに思いついてしまうほど怠惰で墮落、他人には無関心を貫く暇人、つまりこのぼくはこの四月の春、祐天寺神流と出会ってしまう。この出会いはぼくの人生の転換期と
ゆつてんじかなないうのだろうか？ いわないのだろうか？ まあ、どうでもいいんだけどね。

ブローグ

あの日の彼女はいつもどおりであったと思ったが、今思えばどうもそれはぼくの勘違いであったようだった。

「いいな。今から問う三つの質問に答えろよ。ちなみに答えなつかたら殴る。応えなくても殴る。だから、率直に答えろよ、率直にだぞ。つまりは素直にだ。いいな、素直にだぞ」

ぼくの目の前にいる彼女、祐天寺神流はゆつてんじかなそう言った。

そう神流はいつもこうだ。なぜかといういつも唐突に質問や疑問を投げかけてくる。しかもけっこう要領ないものばかりである。なんの因果関係があるかも皆目見当がつかない。

さらに、それらのぼくの答えが神流に気に入るようなものでないと蹴ってくる。鳩尾に。つま先蹴りが。タイ人顔負けのが。

そんなものはくらいたくはないので、ぼくは内心で覚悟を決め、神流の質問の内容を聞いた。

「うむ。ではひとつめなんだが……神様とは何だろうな……」

……ふう。

「人間は弱い生き物だ。だから人間が生み出した偶像には間違いないだろうけぶえほ……」

み、鳩尾に蹴りが……。鋭い蹴りが……。なぜ？ホワイ？ボクナニカヘンナコトイッタカナ？

「そういうことをきいているんじゃない。もっとこう……、いやもついい。次だ。次の質問に移るぞ」

ちよつと待ってもらいたい。鳩尾にいいものもらったから、うまくしゃべれない。しゃべることができない。だから、ちよつと待つて欲しかった。ていうかまだ答えきってないんだが……。

だけど、神流という女は、

「ほら、なに倒れているんだ。それは人の話を聞く態度ではない

だろう。早く立ちたまえ」

こういう奴なんだ。

ぼくはまだ鳩尾が痛むが嘆息しながらものっそりと立ち上がった。ここで立たねば……おそらくは追撃がくるだろう。

「うむ。よし、ではふたつめだが、何で人間は死ぬのだ？」

……今日は特に脈絡のない質問をしてくるな……いったいどうしたのだろうか？

「人間に限らず、生あるものには死は絶対だろ。それをくつがえすことなんかおこがましいことだ」

まあ、ぼくにとつて「生死」ということなどに興味はおきんがな。

「やつぱり、そう……なんだよな……」

神流は上を向き何か物思いにふけた。

らしくない。

いつもの神流らしくない。

あの神流がするはずのない質問をしてくるだけでも異常事態だ。

「明日は雪が降るかもな」

「そんなものは起きん。ましてやまだ十月、雪も降らん」

ごもつとも。冗句をこつとも真顔で答えるのはいつも通りだ。

神流はふうと一息つく。

「最後の質問だが……」

神流は言いづらそうにぼくの方を向く。そのときの表情が少し硬く、不安な感じだったのをぼくは見落とさなかった。

神流は息を吸って、吐く。そして、訊く。

「神様と出会う二つの方法って知っているか？」

それから一週間後、祐天寺神流はいなくなった。

プロローグ（後書き）

初めまして。虎鉄といいます。
なんか思いついたままに書いてしまった作品です。暇なときにお気軽に読んでみてください。

？

ドアをノックする音が聞こえた。

それから声が聞こえてくる。未だに聞き慣れないその声は莉子さんの声だろう。

朝ですよ、というその間の抜けた目覚ましは、余計に睡魔を誘わせる。

だけど、ぼくは、パチリと目を開く。そして、のそりとベッドから上半身を起こした。時計を見る。七時十分。目はまだ眠たげそうな感じだが、頭は逆に冴えていた。めずらしいことに。

それもそのはず、今日から新学期、学校へ行かなければならないからだ。

はつきりいうと、学校へ行くのはめんどくさい。歩くのはだるいし、このままずっと眠っていたいとさえ思っているほどだ。

だけど、これで……、

「……この家に居なくてすむな」

ぼくはぼそりとつぶやいた。

ぼくは学校指定の学生服に着替え、鞆を手にはら下げ、自分の部屋を出て階下へと向かう。

途中、にゃあと鳴くぼくの飼い猫が寝転んでいた。

……十点だな。

「……クロエ。……行ってくるよ」

黒猫のクロエに手を振って階段を下りる。後ろで「いつてらっさい」といつてくれるようにクロエはにゃあと鳴いた。

……それにしても……二十点だな。シンプル、イズ、ザ、ベストだ。

一階の居間にたどり着くと、そこには、父と莉子さんがすでに朝食を摂っていた。

「……おはよう。父さん」

ぼくは父にあいさつをだけして、そのまま玄関へと向かう。だが、途中で父の言葉に止められた。

「待ちなさい。母さんにあいさつはどうした？」

厳格に言い放つ父。母……莉子さんはそわそわしている。

「……行ってきます」

ぼくは言葉だけ残して家をでた。

高校一年流れるがごとく流れ、早くも二度目の桜舞う季節。

ぼくは高校までの桜並木の通学路を歩いていた。

去年から歩くことになったこの通学路には、歩道の両側に桜の木が挟むように植えられていて、ちょうど今満開を迎えている。とても景観だ。

四月の春の風はゆるやかで暖かく、桜の花びらをぶわあと舞い散らす。ひらひらとゆれて散っていくそれは人々の心を魅了する。

……だけど、花なんてものは二、三週間すれば力尽きて散っていく。それは人の心を魅了しない儚いものである。だからこそきれいに咲いているわけだがね。

歩くこと約二十分ちよいで、ぼくが通う私立神崎高校かんざきの校門前に着いた。

私立神崎高校は今年で創立五十年という古い歴史があり、偏差値が六十前後の県内でも屈指の有名進学校だ。それに加えて五年前に校舎を改装工事してきらびやかな新校舎となっている。

神崎高校にはもうひとつ特徴がある。校舎の後方にそびえ立っている大きな、とても大きな山が存在する。その山はこの町では神が住まう霊山としていわれている。定かではないが、山に住む神がこの学校の生徒を見守っているんです、と校長は言っていた。校長が言ったせい、ものすごく嘘っぱく聞こえてしまったのを覚えている。

……まあ、神がいようがいまいがどうでもいいんだけどね。

ぼくは校門から一步踏み出す。この一步がまた退屈な日々への一步だとさえ思えてくる。憂鬱だ。

まわりを見回しても、いつもこいつもまるで今日から輝かしい日々が始まるのだろっ、というような希望や期待に胸をふくらましているような奴ばっかりなのに、ぼくという者は……

まあ、いいんだけどね。

そんななかぼくの耳にだけ、とはいかないほどのささやき声が聞こえてくる。

「ねえ、見てあの人」「きれい、モデルさんかな?」「……女神だ」「私もあと二十歳若ければ……くそう」

ふと眼をそちらに向ける。

桜吹雪の舞う中に、一人、女性が悠然とりりしく、美しく立っていた。

その彼女を含む光景はとても絵になっている。皆が見とれるのも無理ないなと思ったほどだ。

まあ、そんな彼女も自分が注目されているのを自負しているみたいな感じがする。ほら、みなさい愚民共みたいなの?

まわりが足を止めている最中、ぼくは踵を返し、クラス発表の掲示板へと向かう。

ぶるっ……。

なんか背筋に、冷たい視線を感じたような、感じなかったような、気がした。

後ろを向くが何もない。きれいな彼女と野次馬がいるだけだ。はて?と思いつながらぼくは前を向きどこのクラスかを調べる。

……あつた。二年五組か……。他の奴は知らん名前ばっかだ。まあ、覚える気もなかったけど……。

クラス確認を終えたので、そのまま玄関へと進み、指定された靴箱にスニーカーを放り込む。そして内履きに履き替えて、階段へと向かう。

二年生の教室は二階にある。今後、階段を使うことになるのかと思つとおもわずため息が漏れた。

……階段。地味に疲れるんだよな。

二階につき、L字型の通路曲がると、最初の教室が二年五組であった。

教室に入ると、まだ早い時間帯であるためか、人がまばらであった。教卓近くまで歩き、黒板に貼られてある座席表を見る。五列目の前から七番目、後ろから一番目、つまり最後尾だ。うん。悪くない。

まあ、どこでもいいんだけどね。

……うそ、一番前とかいやだね。寝れなそうだし。

まあ、一番前でも寝るんだけどね。

鞆を自分の机の脇にぶら下げ、机に突っ伏し軽く自分の世界に浸る。ああ、眠いな。

しばらく眼をつむっていたら、どうやら時間がたっているようだ。まわりがざわめいているのが耳に入ってくる。

顔を上げると、教室内には人がもう集まっていて、そこらかしこで数人ずつ集まって談笑している。

がらら、と教室の扉が開き、担任らしき人が入ってきた。

おはようございます、とあいさつをしてから「担任の水澤ゆかりです」と軽く自己紹介をした。

まわりの男子は担任が女性で、若く、そして美人ということに歡喜あつている。女子もきれいで優しそうとかとささやきあつている。みんながみんな楽しそうにしている。笑顔に花が咲いている。ぼくは違うけど……

まあ、ぼくには関係のないことである。

他人には興味がないし、興味が持てない。

おそらくぼくは……どこか欠落しているのだろう。

欠陥製品だ。

きつと、大切な、なにかをどこか落としてしまったんだろう。ま

るでカギを落とすかのように。ポロンと。

だから、このまま、ズルズルと、這いつくばるようにズルズルと、生きていく。まるで死んでいるみたいに、生きていく。

ズルズル、ズルズルと。

だと、思っていたんだが。

ぼくは。

息をのんだ。

有無を言わさないだろう眼光に。

人々を惑わすだろう美貌に。

圧倒的な存在感に。

そして何より……、その彼女が放つ異質さに。

祐天寺神流はやってきた。

？

祐天寺神流さんは東京の高校から母親の都合でこの神崎高校に転入してきました、と担任水澤先生が説明した。

さあ祐天寺さん、と水澤先生が彼女に自己紹介を促す。

彼女は一步前に出る。すうっと、背筋を伸ばす。すらりとした長身の彼女から女性らしい高いソプラノの声音が教室に響く。

「うむ。祐天寺神流だ。これからよろしく頼む」

彼女の発した言葉は短く、堂々と、はきはきとして、そして、どこか威圧的であった。教室内がしいん、と静寂に包まれる。だれもがあっけにとられていた。彼女の美しい容姿に、鋭い眼光に、響かせる声に、そして何よりその存在感に。全員が見惚れている。全員が見とれている。

まあ、ただ一人ばくという例外を除いてだけど。

静寂は何秒、何十秒、何百秒と続いているような錯覚に陥る。そんな静寂に見かねた水澤先生がおろおろと手をこまねきながら、「え、えっと……」と何かしゃべろうとしたとき、ふくらみ続けている風船がわれたように、クラスメイトが発狂した。文字通りに。「キヤー、かつこいー、ステキー」「女神キター」「ちよー美人、肌白ーい」「俺、このクラスになれて、良かった。……うっ、う」「泣くなよ」「髪さらさらそー」等々と彼女のことを闇雲に褒めちぎる。確かに容姿は群を抜いていると思う。顔立ちが端正で凛々しく、腰ほどまでに伸びている髪はつややかで美しく、すらりとした170ほどの身長はモデルをみるかのようだ。そしてその立ち振る舞いが彼女の美しさを際立たせている。

まあ、どうでもいいことだがね。

今だ続く壮絶っぷりに彼女はふふつと軽くほほえみ「ありがとう」と言った。そんな仕草がさらに拍車をかける。より熱を帯びていく。彼女は困りも、照れる仕草もしない。ただ、温かく、見守るように

眺めているだけだ。

……ん？

ぼくは気づく。

彼女は……。

彼女は、ほんとうに温かく見守るような、愛ある母性的な瞳をしていただろうか？

彼女の眼を見る。

……………。

まあ、どうでもいいか。

水澤先生が必死にクラスをたしなめるとクラスメイトの熱は少しずつ冷めていき、落ち着き始めていた。では、と水澤先生が彼女に對しての質問しましょうか、と言い、クラスメイトは一気に彼女に質問攻めにした。だが、彼女は困るそぶりも見せずただただにこやかにしているだけだ。水澤先生はおろおろとしながら「一人ずつ、一人ずつ」と促す。そうしてどうにか彼女に對しての質問大会が始まった。

クラスメイトが彼女に興味や好きなもの嫌いなものなどと定番な質問をかけていく。クラスメイト全員は彼女に對し興味がとてもおりのようで、ぼくには彼女に興味がない。

まあ、確かに彼女に對してなんらかの異質さ？不自然さ？を感じたような気はしたが……。

些細なことだから、ぼくは流した。

ぼくは机に突っ伏す。眼を閉じる。耳からクラスの喧噪が聞こえる。それはぼくにとっての雑音。だが、興味がない授業で教師がしゃべるのが呪文か、子守歌に聞こえるように、クラスのざわめきはぼくにとっての子守歌。

……眠くなってきた。まどろみを感じる。ほんの一瞬何か視線のようなものを感じた気がしたが、睡魔がやってきた。ぼくを眠りに誘った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6702x/>

神様と出会う二つの方法

2011年10月31日03時02分発行